

# たまねぎ

担当者 技能研究員 深海 健太郎

試験課題名	品種系統選定試験
目的	本町に適した多収・高品質・良食味品種を選定し、生産農家への普及に資する
期待される成果	地域適合複数品種栽培により生産性向上を図る
連携機関	上川農業改良普及センター士別支所 JA北ひびき和寒基幹支所

## 1 供試品種・資材

品種

スーパー北もみじ（七宝） 北もみじ2000（七宝）  
イコル（タキイ） オホーツク222（七宝）

## 2 耕種概要

土 壤 ～ 灰色台地土(埴壤土) ※三笠圃場

前 作 ～ トマト

播 種 日 ～ 3月22日 定 植 日 ～ 5月27日 収 穫 日 ～ 9月20日

栽 植 密 度 ～ 畦幅30cm×株間10cm 33,333株/10a当たり 試験区面積 1.8m×2.0m

## 3 土壌診断結果と施肥量

### (1) 土壌診断結果

(mg/100g)

pH	EC	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO	熱水抽出N
6.75	0.062	97.5	34.7	61	512.6	13.8

### (2) 土改資材と堆肥 (kg/10a)

堆 肥 ～ 無施肥

### (3) 施肥内容 (成分量/%)

基 肥 ～ 硫 酸 ア ン モ ニ ア ( 21 - 0 - 0 ) 5月27日 全層施肥  
基 肥 ～ 粒 状 過 磷 酸 石 灰 ( 0 - 18 - 0 ) 5月27日 全層施肥  
基 肥 ～ 硫 酸 加 里 ( 0 - 0 - 50 ) 5月27日 全層施肥

### (4) 肥料の要素量

(kg/10a)

		N	P	K
基 肥	硫酸アンモニア 57kg	12	-	-
	粒状過磷酸石灰 110kg	-	20	-
	硫酸加里 20kg	-	-	10
合 計		12	20	10

## 4 調査項目

生 育 調 査 ～ 播種日・発芽期・発芽率・定植時の苗質・定植日・倒伏開始

収 量 調 査 ～ 総収量・規格別収量

## 5 生育調査

項目	品種	スーパー 北もみじ	北もみじ2000	イコル	オホーツク222
播種日		3月22日			
発芽期		4月2日	4月1日	4月1日	4月1日
発芽率(%)		97	97	96	93
定植時の苗質	生葉数	3.5	2.9	3.0	2.9
	葉長	27.6	33.0	31.1	27.0
定植日		5月27日			
倒伏開始		8月29日	8月28日	8月29日	8月22日

## 6 収量調査

項目	品種	スーパー 北もみじ	北もみじ2000	イコル	オホーツク222
総収量(kg/10a)		4,012	3,807	3,376	3,648
規格別割合(%)	2L	9.2	2.3	9.5	1.3
	L大	26.4	22.1	34.5	16.8
	L	46.6	52.2	39.7	46.5
	M	12.4	20.2	13.5	30.8
	S	5.1	3	3.8	3.3
	外	0	0	0	2.2

※規格 1球重 150~300g 2 L 9.0cm以上 L大 8.0~9.0cm未満  
L 7.0~8.0未満 M 6.0~7.0cm未満 S 5.0~6.1cm未満

## 7 病虫害防除履歴

殺虫剤			除草剤・殺菌剤	
7月 26日	オルトラン水和剤	3,000倍	7月 6日	ナブ乳剤・バサグラン乳剤
			7月 26日	カズミンボルドー

## 8 試験結果概要

### (1) 生育経過

ハウス内直播で3月22日に播種を行った。発芽はスーパー北もみじが4月2日、その他1日に発芽揃いとなった。どの品種も9割以上発芽しており、良好であった。

定植は5月27日に行った。天候が安定せず、畑が乾かなかつたため定植の時期は遅れた。定植が遅れ老化苗になってしまい活着が悪かったため、初期生育はかなり芳しくなかった。

活着後は生育が回復し、玉も肥大したが生育の遅れが響いたのか倒伏開始は、オホーツク222が8月22日と例年よりも約一月遅れ、次いで残りの3品種が8月29日となった。

### (2) 収量調査と考察

今年度の収量はスーパー北もみじ 4,012kg > 北もみじ2000 3,807kg > オホーツク 2,502 kg > イコル 3,376kgとなり、道が設定する目標収量には届かなかった。

原因として、定植適期に雨が降り本来定植する予定の圃場に作業機械が入れず急遽他の圃場に定植場所を変更した事が挙げられる。圃場変更を躊躇した為、定植遅れによる徒長がおこり、初期生育が確保できなかった。

また、7月6日に除草剤を散布したが効果が芳しくなかった事等も、原因の一つとして考えられる。繁茂した雑草によって生育初期の株の一部が淘汰された事が収量に影響した。

以上の二つの要因が重なり、重量と玉数の両方が減少したため収量が低下したものと考える。

和寒の玉ねぎを作付している組合員の方々は、今年度の様な定植するには圃場条件が悪い時期の中で少しでも条件の良いタイミングを逃さずにしっかりと定植していた。圃場の状態を見極めるためには、やはり土の知識や経験なのだ実感した。